

児童生徒支援のための『ワンポイント・アドバイス』



学級づくり 12 箇月

平成 25 年 11 月号

京都府丹後教育局

～ユニバーサルデザイン授業の取組～

Tel : 0772-22-2175 Fax : 0772-22-0479
HP : <http://www.kyoto-be.ne.jp/tango-k/>

この便りは、平成 24 年度丹後特別支援教育研究会研究グループⅡの協力を得て作成しております。

通常学級における授業での支援

2学期の折り返し点を過ぎました。この時期は、合唱コンクール、学習発表会など、大きな文化的行事の取組もありますが、日々の授業の充実を大切にしたいものです。

近年、「発達障害等のある子どもを含め、どの子どもにもわかる授業づくり」をどのようにしていけばよいのか、その1つの方法として「**ユニバーサルデザイン授業**」の取組が広がっています。授業づくりに**特別支援教育の視点**を加味し、発達障害等のある子どもが学びやすいように授業を改善する、それが結果的にすべての子どもたちに分かりやすい授業になります。発達障害等の有無にかかわらず、**すべての子どもが楽しく『わかる・できる』**ように工夫・配慮された**通常学級における授業デザイン**のポイントについて紹介します。

授業のユニバーサルデザインの事例

学級の子どもたちの中で、授業に参加できなかつたり、授業内容が理解できなかつたりする子どもはいませんか。学習でつまずきやすい子どもへの支援が、他の子どもたちにとっても「わかる・できる」授業につながります。実際に行われている支援の具体を紹介します。

● (小学校中学年)の学校生活の様子から

文字の見え方に困り感が強い。活動の見通しがもてないと不安になる。上手いできないとイライラして、声を出したり、物に当たったりして、周囲の子どもが集中できなくなる。指名されていないのに自分の話を始めてしまう。身体を動かすことは好きである。

● 環境整備や支援の具体例

- ・教室の前面や側面前方に、視覚への刺激になるものを貼らない。
- ・学習のめあて、学習活動の流れを黒板に書き、視覚的に確認させる。
- ・「話す人は1人だけ」を学級のルールにし、話し手に注目させ、聞きやすくする。
- ・学習に関係のない発言があればサインを送り、本人が自制できるよう促す。
- ・操作活動を効果的に取り入れる。(ブロックやカードの使用など)
- ・色つきの画用紙に間違えやすい字を大きく書いて示す。



- ・板書の内容をまとめごとに線で囲む。



まとめごとに
線で囲むと…



気になる子どもの特徴と「全員参加」の授業づくりのポイント

学習でつまずきやすい子どもに有効な支援の工夫や配慮を紹介します。

パターン1 ・今日の授業で、何を学ぶのか分からない。聞いただけでは記憶に残りにくい。

- 支援方法** **単元や本時のねらいを明確にし、今日の授業で何を学ぶのかを提示する。**
活動の内容に合わせて、集中しやすい場所、支援の届きやすい場所に変えたり、子ども同士の学び合いやペアワーク、グループワークを効果的に取り入れる。

パターン2 ・今、何をしたらいいのか分からない。いつ終わるのか不安になる。

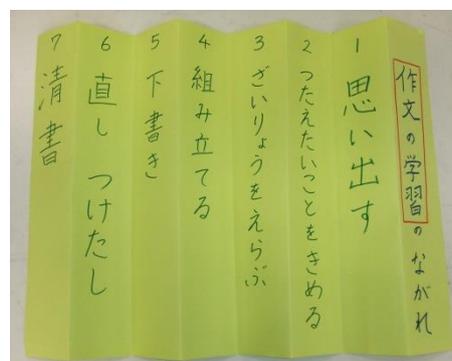
- 支援方法** **スケジュールを板書して、今日の課題をやっているのかを示す。終わった課題は消す。**
時間が残ったときの課題も指示する。いつでも取り出せる課題を持たせておく。
活動の時間を設定する。タイマー（残り時間が見える）を使う。
授業の流れをパターン化する。単元全体の流れも視覚化して掲示する。
完成までのプロセスを示し、完成品の実物を見せる。



1時間の流れと活動の指示
(キャラクターで注意を喚起)



残り時間の提示
(見えるところに置く)



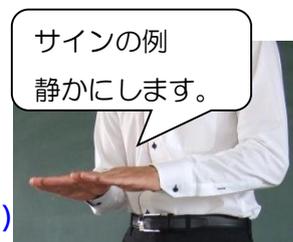
単元全体、学習の見通しの提示
(折り畳んで部分的に見せることも可能)

パターン3 ・授業に興味をもてず、学習にむかえない。

- 支援方法** **授業の前にどんなことをするのか予告して、その子の反応を観察しておく。**
どうしたらできそうかを本人と相談する。時間や量を限定して取り組ませる。
学習におかえない状況になる前に、声をかけたり思いを聴いたりする。

パターン4 ・筆箱や教科書を落とす。思ったことをすぐに話す。席を立つ。

- 支援方法** **机の上には使うものだけを出す。**
学級のルール（話す人は1人だけ）を再確認する時間をとる。
口頭での注意ではなく、本人とサインを決めておいて、自制を促す。
立ち歩いてもよい活動を取り入れる。(ノート・プリントの回収や配布)



このような工夫によって、全員が落ち着いて課題に取り組むことで、担任及び各教科の先生方の指導効果がより一層現れてきます。まわりの先生が普段されているちょっとした工夫について学び合い、全教職員が一致してユニバーサルデザイン授業に取り組んでいくことが大切です。また、その子の成長（少しでもできるようになったこと）は、褒め言葉で本人に伝えることで、子ども自身も達成感を味わい、次への意欲に繋がります。

☆次回の1月号の内容は「気になる児童生徒」を予定しています。